

女性の「理系嫌い」は日本の社会風土の産物だ

『なぜ理系に女性が少ないのか』横山広美氏に聞く

山本 舞衣：『週刊東洋経済』編集者 / 印南 志帆：東洋経済 記者

2023年01月01日



横山広美（よこやま・ひろみ）／東京大学教授。1975年生まれ。博士（理学）。東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構副機構長・教授。東京理科大学で博士号を取得後、専門を物理学から科学技術社会論に変更。AI倫理や大規模科学技術の政策課題など、科学と社会の問題について研究している。（撮影：梅谷秀司）

日本の大学の理系学部は、他国と比べ学生の女性比率が非常に低い。その背景には、「優秀さは男性のものであり女性には不要である」という「社会風土」があると本書は指摘する。

日本の社会風土が女性の理系進学にも影響

——日本では「女の子は数学が苦手」と、昔からいわれてきました。

今日では多くの研究者が、理数系の学問における能力の違いは男女差ではなく個人差によるものだと考えています。国際的な学力テストの結果も、日本の15歳の成績は男女でほぼ同等です。けれど大学進学の際になると、成績の差をはるかに超えて日本の女性は理系分野、とくに数学・物理学や工学を選ばない。いったいなぜなのか。

この問題に、2017年から3年間、男女3人ずつ計6人のチームで取り組んだのが、本書の基になった研究プロジェクトです。

研究では「日本の社会風土」を中核としました。海外の先行研究では、理工系分野で学ぶ女性が少ない理由として、①分野の男性的カルチャー、②幼少時の経験、③自己効力感（自分は目標を達成できるという自信）の男女差の3つが挙げられていて、この枠組みは私たちにとっても有益でした。

でも、日本の現状はそれだけでは説明できないようにも思える。男女の不平等が多く潜んでいる日本の社会風土が、女性の理系進学にも影響しているのではないかと。そこで4つ目に加えたのが、「性差別についての社会風土」です。データを統計的に分析することで、この社会風土を客観的に議論しようと努めました。

——文系・理系にまつわる事柄は従来、印象論で語られがちでした。

人々が各学問分野に対してどのようなイメージを持っているのか、アンケート調査をオンラインで実施しました。その際、性別など回答者の属性が偏らないよう注意しています。

分析から見えてきた重要なポイントは次の2つです。1つ目は、物理学や数学を専攻した後の就職先には男性向けの仕事しかないのではないかと「就職イメージ」の強さです。2つ目は、「数学ステレオタイプ」とも呼べるもの、つまり算数や数学は女の子の得意科目で女の子は苦手だという誤った思い込みの強さです。後者は厄介で、5歳ぐらいから定着し始めていることが知られています。

——「思い込み」が、能力よりも強く影響すると。



日本では、理系、とくに理工系の学問は、学ぶこと自体にも、その先の就職にも、男性的なジェンダーイメージがあります。20～69歳の男女1086人を対象に行った調査では、文系を含む18の学問分野のうち、「男性に向いている」と考えられているのは、1位・機械工学、2位・医学、3位・歯学、「女性に向いている」は、同看護学、薬学、音楽でした。

一方、学問分野と就職のしやすさを結び付けた場合には、大きな男女差はなかった。医学や看護学などは男性にとっても女性にとっても就職しやすい分野と思われており、音楽や美術はその逆といった結果です。それを踏まえると、女性が就職面を理由に理工系分野への進学を避ける傾向には、就職の有利・不利よりも、就職後の仕事内容のイメージのほうが強く影響していると考えられます。

「学問分野から連想されるキーワード」についての調査（対象は同791人）では、機械工学分野の代表的なキーワード、「油まみれ」「溶接」などは、かなり男性的なイメージを持たれていました。現在の機械工学の最先端の研究は油と無縁のクリーンルームで行われていたりもするのですが。

——優秀さや理工系学問は男性のもの、という価値観は海外にもありそうですが、日本の女性の理系進学率の低さははず抜けています。

海外では、たとえ旧来の差別的な価値観が残っていても、「優秀さはジェンダーとはひも付かない個人的なものである」という感覚のほうが、社会に強く浸透しているように感じます。また、一連の調査結果からは、「論理的にしゃべる、議論に強い、打たれ強い女性は好まれにくい」という日本が抱える問題も透けて見えました。

——理系の学生や研究者に女性が少ないことを受け、近年は女性比率を上げる試みもあります。

東京大学は今後5年間で約300人の女性教授・准教授を雇用すると宣言しました。私は、最も重要なのは機会平等であり、結果の平等はそれに伴って実現していくものだと考えています。ただ、日本の男女平等の歩みはあまりに遅い。どこかの段階でテコ入れしなければという判断は、今のような過渡期には起こりうることです。

また、別の観点として、新たに人を雇用する際の選考過程にも注意が必要です。各選考段階で、通過者が不自然に男性に偏っていないかを確認しなければいけません。

不平等の是正で生きやすい社会へ

——「女性にげたを履かせる」「逆差別」という話もありますが、それとどう違うのでしょうか。

すでに存在する不公平に目を向けるという点で、「げた」とはまったく違います。本書では、オーケストラ団員のオーディションを性別がわからない形で実施したら合格者に占める女性の割合が増えたという例を紹介しました。これは、男性が男性であるだけで実力とは関係ない何らかの利益を得ていた可能性を示唆します。

今はまだ、社会全体がそうした影響を受けている可能性を意識する必要があるのです。こういった話の言葉選びには日々難しさを感じていますが、不平等の是正は決して「逆差別」ではなく、男性にかかるプレッシャーの軽減にもつながるのだと伝えていきたい。

その点、中学1年生（男女1089人）とその親を対象に行った実験の結果には希望が持てます。「理系進学は女子の就職に有利」に加えて「数学ステレオタイプは誤り」「社会が男女平等に向かう重要性」といった情報を提供し、その前後で「理工系分野に進学したいですか？」という質問に答えてもらう実験です。

女子生徒は、情報提供前より後のほうが理系分野への進学に前向きになりました。さらに、同じ情報に触れた男子生徒も、理系進学に前向きになりました。女性に優しい社会は男性にも優しい。不平等の是正は、多様な人が生きやすい社会への入り口です。

（聞き手 山本舞衣、印南志帆）